

研究主題 「自閉症の児童の諸感覚の過敏性や鈍感性を

継続的に調整していく自立活動の指導の工夫

－重度・重複学級に在籍する児童への指導を通じて－

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課

都立石神井特別支援学校 教諭 工藤 政則

第1 研究のねらい

中央教育審議会は、平成28年12月21日の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の中で、「特別支援教育の対象となる子供たちは増加傾向にあり、子供たち一人一人の障害の状況や発達の段階に応じて、その力を伸ばしていくことが課題となっている」と指摘した。

東京都は、「東京都特別支援教育推進計画（第二期）・第一次実施計画」（平成29年2月）で、目指す将来像の一つに、「教科や自立活動の指導に精通した専門性の高い教員が多数育成されている。」を掲げている。

都立特別支援学校在籍者数12,528人（平成29年5月1日）の約73%が知的障害特別支援学校に通っている。そのうち、多くの児童・生徒が情緒の安定に課題を抱えている。情緒が不安定になる要因には、諸感覚の過敏性や鈍感性の影響が指摘されている。また、諸感覚の過敏性や鈍感性に関する指導に課題や困難さを感じている教師も多い。

そこで本研究では、個に応じた自立活動の指導を意図的・計画的に実施し、自閉症の児童の諸感覚の過敏性や鈍感性を継続的に調整していく指導の工夫をすることをねらいとする。

第2 研究仮説

諸感覚の過敏性や鈍感性が著しい自閉症の児童には、一日の学校生活を通じて、個に応じた自立活動の指導を継続することで、諸感覚の過敏性や鈍感性が調整され、情緒を安定させて、自立を図るために必要な態度及び習慣を養うことができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

自立活動の教育課程について調査した。自立活動の指導は、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月）により、各教科等との関連を図り、学校の教育活動全体を通じて行うことを視野に入れて個別指導計画を作成し、効果的に指導を行う必要があるとされている。

「教育支援資料（文部科学省平成25年10月）」には、「自閉症の障害特性として、感覚知覚の過敏性や鈍感性が、パニックや突然の不安定状態などを引き起こす可能性がある。」と示されている。このことは、自閉症の児童を指導してきた私の経験とも一致しており、自立活動の指導を工夫し、調整していく必要があることを示していると考えられる。

2 調査研究

調査研究は、平成29年8月に都立知的障害特別支援学校12校の学級担任を対象に実施した。

(1) 自立活動の内容6区分26項目における指導項目の選択について

学級担任が個別指導計画を作成する際に、自立活動の目標として重視している項目を調査した。その結果、自立活動の内容2「心理的な安定（1）情緒の安定」に関する項目が最も重視されていた。このことから、情緒の安定が最も課題となっていることが分かった（表1・表2）。

表 1 自閉症の児童の在籍が半数以上の学級

順位	6区分26項目のうち最も重視している項目	学級数
1	情緒の安定に関すること	61
2	他者との関わりの基礎に関すること	15
3	日常生活に必要な基本動作に関すること	14

表 2 自閉症の児童の在籍が半数以下の学級

順位	6区分26項目のうち最も重視している項目	学級数
1	情緒の安定に関すること	15
2	言語の受容と表出に関すること	13
3	状況に応じたコミュニケーションに関すること	11

この調査研究は、自閉症の児童において、特に情緒の安定が課題であり、諸感覚の過敏性や鈍感性を意図的・計画的に調整する自立活動の指導が必要であることを改めて示している。

(2) 自立活動の指導の工夫の実際について

自閉症の児童の自立活動の指導において、諸感覚の過敏性や鈍感性に関する指導の工夫を行っているかを4件法で調査した。その結果、96.5%の教師が、「指導の工夫ができています」と回答した(図1)。

次に、「指導の工夫ができています」と回答した教師が、どのような指導の工夫を行っているかを分析した。その結果、21.4%の教師が「諸感覚の過敏性や鈍感性の調整を意図した指導の工夫」をしていたが、55.8%の教師は「対処的な支援」にとどまっていた(図2)。

このことを受け、諸感覚の過敏性や鈍感性の調整を意図した自立活動の指導内容の工夫と、これらの自立活動を一日の学校生活を通じて計画的に継続していく指導方法の工夫をすることとした。

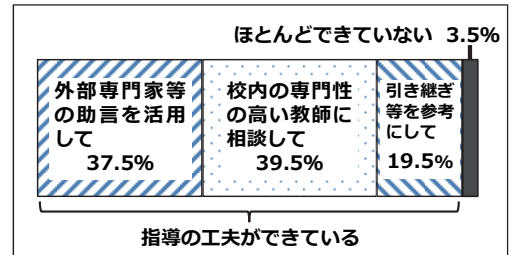


図 1 諸感覚の過敏性や鈍感性に関する指導の工夫のアンケート調査結果

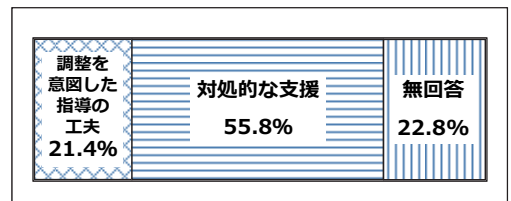


図 2 具体的な指導の工夫の分析結果

3 開発研究

(1) 諸感覚の過敏性や鈍感性の調整を意図した自立活動の指導内容の工夫

具体的な指導内容の工夫に当たり、日々の行動の観察等に加えて、「学校版感覚運動アセスメントシート(感覚用)」(岩永、2017)を活用し、児童一人一人の諸感覚の過敏性や鈍感性の実態を把握した。次に、特別支援学校学習指導要領解説自立活動編(小学部・中学部)(平成21年6月)(以下「現行の学習指導要領解説」という。)等を参考にし、児童一人一人の諸感覚の過敏性や鈍感性の実態に合わせて必要な手だてを講じ、指導内容を工夫した(表3)。

表 3 諸感覚の過敏性や鈍感性の調整を意図した自立活動の指導内容の工夫

行動の観察等	考えられる諸感覚の過敏性や鈍感性	講じる手だて	指導内容の工夫(例)
<ul style="list-style-type: none"> ○頭髪を抜くことが多い ○自分の身体を叩くことが多い ○床を強く踏みつける、ジャンプやスキップをよくしている ○靴や靴下を脱ぐことが多い 	○関節の動き等を感じ取る感覚の鈍感性	○児童が重力に対して自分の身体を支える、振動等を感じ取る、身体や物を操作する活動を行う	<ul style="list-style-type: none"> ○児童がトランポリンを継続して跳ぶ ○教師が児童の腕や脚を振ったり、肩を揺らしたりして振動を与える ○児童が固定遊具で遊ぶ、目的をもって具体物を操作する
<ul style="list-style-type: none"> ○くるくる回って遊ぶことが多い ○姿勢が崩れることが多い ○授業中に立ち歩くことがある ○高い所に登りたがる 	○平衡感覚の鈍感性	○児童が日常の生活で経験する以上の揺れ、加速、回転等を感じ取る活動を行う	<ul style="list-style-type: none"> ○児童がトランポリンで上下に揺れる、ハンモックブランコにうつ伏せに乗って前後に揺れる ○児童が乗った回転ブランコを同じ方向に連続して回す ○台、マット、平均台等を等間隔に置き、その上を児童が渡り歩く
<ul style="list-style-type: none"> ○手のひらをひらひらさせる ○手元を見ないで物を操作する ○動く物を目で追おうとしない 	(眼球運動の未発達)		

○慣れない姿勢や乗り物を嫌がる ○ブランコ等を怖がる	○平衡感覚の過敏性	○児童が、揺れや加速を感じ取る活動を行う	○児童が嫌がらない姿勢がとれる乗り物で、揺れや加速を体験する
○他人に触れられたり、身体が机等 にぶつかったりしても、気が付いていない様子がある ○手指を口に入れることが多い ○身体を密着させてくることがある	○触覚の鈍感性	○児童が触れられる身体箇所に意識を向けるように促し、教師が、様々な触り方で、児童の身体に触れる	○教師が触れる身体箇所を児童が見ていることを確かめながら、児童の身体各部位をもむ、さする、つつく、押すなど、圧や触れる面積に変化を付けながら、触れる
○衣服の好みが強 ○箱や袋の中に手を入れることをためらう ○他人が近づいてくると避ける	○触覚の過敏性	○児童に触り方や触れるタイミングを意識させ、教師が児童の身体に触れる	○教師が触れる身体箇所を児童が見ていることを確かめ、安心させながら、児童の身体各部位に触れる。強めの圧で広範囲に触れる
○友達の泣き声に過剰に反応して、 情緒が不安定になる ○何も聞こえないようなときに、耳 を押さえていることがある	○聴覚の過敏性	○児童が自分で音をコントロールして聴く ○触覚の調整と合わせて進める	○本人が楽しめる活動の中に、様々な音楽や音を加え、自分で音をコントロールできるようにする
○排尿の間隔が長く、尿をためて失敗 することが多い	○膀胱の感覚の鈍感性	○諸感覚を調整する 様々な活動に取り組む	○定時排尿を促し、排尿の時間を確保して成功体験を重ねる

(2) 一日の学校生活を通じた自立活動の指導方法の工夫

具体的な指導方法の工夫として、現行の学習指導要領解説に基づき、各教科等及び日常生活の時間にも、諸感覚の過敏性や鈍感性を調整する自立活動の指導を設定した（図3）。

特に、登校後・給食前後・下校前の日常生活の指導の時間は、児童の毎日の生活リズムを支える時間帯に設定されており、活動を習慣化しやすい利点がある。また、朝には覚醒を意識した活動を行うなど、それぞれの時間帯に適した活動を設定しやすい。

そこで本研究では、日常生活の指導の時間を有効に活用し、指導方法を工夫した。

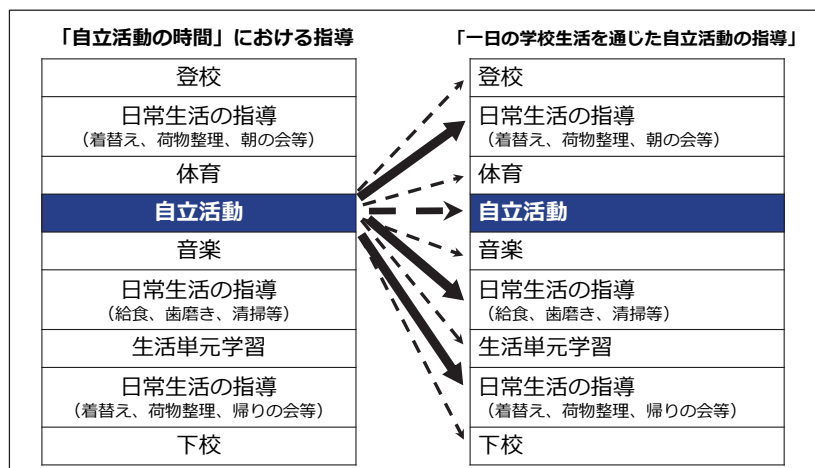


図3 「自立活動の時間」における指導を「一日の学校生活を通じた自立活動の指導」に展開するイメージ

4 検証授業

(1) 検証授業の概要

検証授業は、都立知的障害特別支援学校小学部第3学年の重度・重複学級に在籍する3人の児童を対象に実施した。学級担任と共に一人一人の児童の諸感覚の過敏性や鈍感性の実態を把握した上で必要な手だてを講じ、「自立活動の時間」における指導内容を工夫した（図4）。

全5回の検証授業ごとに児童の行動を記録したほか、一日の学校生活を通じた自立活動の指導を7週間継続して実施した後、児童の情緒の安定における変容を検証した。

活動例	●調整の対象となる主な諸感覚 活動内容
もみもみ・ブラブラ	●触覚 児童が好む曲に合わせて、教師が児童の身体をさすったり、揺らしたりする
トランポリンとハンモック	●平衡感覚、関節の動き等を感じ取る感覚 トランポリンで跳んだり、ハンモックにうつ伏せで乗って前後に揺れたりする中で、目標物にタッチをする
リンゴとバナナ	●触覚、眼球運動、関節の動き等を感じ取る感覚 リンゴ又はバナナの模型の形を手探りで区別して、同じ形の枠に入れる

図4 「自立活動の時間」における主な指導の工夫

(2) 仮説の検証

ア 「自立活動の時間」における指導（平成29年9・10月実施）

「自立活動の時間」における指導では、図4で示した内容に取り組んだ。全5回の検証授業の後、3人の児童それぞれの行動における変容を検証した（表4）。

表4 「自立活動の時間」における指導において見られた児童の行動における変容

児童	指導前の様子	関係する主な諸感覚	活動例	指導後の様子
A	教師が児童の <u>身体に触れて呼んでも、気が付いていないなど、反応が弱かった</u>	○触覚	もみもみ・ブラブラ	児童は、教師や触れられる身体箇所を意識し、 <u>触れ方に応じて身構えたり、触れられる感触を楽しんだりするようになってきた</u>
B	リンゴやバナナの模型を取ろうとしても、 <u>すぐ落としてしまうなど、手に着かない様子だった</u>	○触覚 ○眼球運動 ○関節の動き等を感じ取る感覚	リンゴとバナナ	ブラックボックスの中から、動物の口の形や大きさに合うリンゴ又はバナナの模型を <u>手探りのみで区別し、取り出せるようになった</u>
C	トランポリンを跳ぶ際に <u>姿勢が崩れ、バランスが取れずに継続して跳ぶことができなかった</u>	○平衡感覚 ○関節の動き等を感じ取る感覚	トランポリンとハンモック	<u>直立姿勢を保ちながらトランポリンを跳べるようになり、目標物にタッチをするなど、眼球運動にも改善が見られた</u>

イ 一日の学校生活を通じた自立活動の指導（平成29年9月から11月にかけて実施）

図3で示した一日の学校生活を通じた自立活動の指導を7週間継続して実施した後、3人の児童それぞれの情緒の安定における変容を検証した（表5）。また、1人の児童において、諸感覚の調整が進むと同時に、排泄の自立も進むという変容が見られた。

表5 一日の学校生活を通じた自立活動の指導において見られた児童の情緒の安定における変容

児童	指導前の様子	関係する主な諸感覚	活動例	指導後の様子
A	身体に触れて言葉を掛けても、 <u>振り向く、目を合わせる等の反応が弱く、自分から他人に関わる事がほとんどなかった</u>	○触覚	給食後にもみもみ・ブラブラ	教師に注目したり、 <u>目が合ったりすることが増え、指差し等、意思の表出が見られるようになってきた。自分から楽しそうに教師に要求を働きかけることが増えてきた</u>
B	物を扱う際に、 <u>手元を見ないで行おうとし、うまくいかずに情緒が不安定になることが多かった</u>	○触覚 ○眼球運動 ○関節の動き等を感じ取る感覚	給食前にリンゴとバナナ	<u>手元・足元等を見て確かめるようになってきたことで、物をうまく扱えるようになり、落ち着いて活動できるようになってきた</u>
C	活動の途中で <u>寝転がるなど姿勢が崩れることが多く、活動の再開を促すと怒り出すなど、情緒が不安定になることが多かった</u>	○平衡感覚 ○関節の動き等を感じ取る感覚	登校後にトランポリン	<u>様々な活動時に寝転がるなど姿勢が崩れることが少なくなった。日常的に情緒が安定し、怒ることがあっても長引かず、落ち着いて活動に参加できることが増えてきた</u>
	排尿の間隔が長く、 <u>尿をため込んだ末に失敗してしまい、活動が中断することが多かった</u>	○膀胱の感覚	全活動を通じて	<u>排尿の感覚を伝えることができるようになり、失敗することがほぼなくなった。自信や自己肯定感が高まってきた様子が見られた</u>

第4 研究の成果

今回の検証授業では、研究仮説にそった児童の行動及び情緒の安定における変容が見られた。自閉症の児童一人一人の諸感覚の過敏性や鈍感性の実態に着目し、一日の学校生活を通じて個に応じた自立活動の指導を意図的・計画的に継続することで、「対処的な支援」にとどまらず、「諸感覚の過敏性や鈍感性の調整」を図ることができた。

第5 今後の課題

本研究では、検証授業を実施した重度・重複学級に在籍する児童の実態に合わせ、主に平衡感覚及び関節の動き等を感じ取る感覚の鈍感性がある児童への指導の工夫をした。より個に応じた自立活動の指導の工夫をすることが、今後の課題である。

また、本研究の成果は、知的障害特別支援学校に在籍する児童のみならず、特別支援学級や特別支援教室（通級）又は通常の学級に在籍する児童・生徒においても活用できると考える。児童・生徒一人一人の実態に合わせた指導の工夫をすることが、今後の課題である。